

OPIにおける英語話者の「もの」「こと」の使用と習得

坪根 由香里

〔要 旨〕

形式名詞の「もの」「こと」は、日本語の文を生成する際、非常に多く使用されるが、その使用法は多岐にわたり、習得することは容易であるとは言えない。

本稿では英語話者のOPI(oral proficiency interview) データを用い、形式名詞「もの」「こと」の各用法について自然発話での使用状況を調査し、その習得について考察し、習得順序を探った。その上で、坪根(2002)の韓国語話者の結果とも比較を行った。

調査の結果、「もの」は中級以降、使用数、種類がほぼコンスタントに増えていった。一方、「こと」は中級、上級では伸びが見られたが、上級から超級の間には大きな伸びは見られなかった。また、各用法の正用者数の伸びから、中級は形式名詞、名詞化の用法といった構文的に必要な機能が習得される段階、上級・超級は対象を直接指し示さない用法や、特別なニュアンスを示す用法が徐々に習得されていく段階であると言える。各レベルの正用者の割合を基に本稿で提案した習得順序は、①もの形式名詞、こと形式名詞→②たことがある→③Nのこと→④ということ一般化、ということ内容、であった。

韓国語話者との比較では、韓国語話者の方が早い段階で「もの」「こと」を使用し始め、英語話者の方は若干遅れて使用が大きく広がるが、その後の伸びは韓国語話者の方が大きいということが推察された。また、習得順序についても若干の違いが見られた。

キーワード：もの こと KYコーパス 英語話者 習得

1. はじめに

形式名詞の「もの」「こと」は、日本語の文を生成する際、非常に多く使用されるものであるが、その使用法は語本来の意味としてだけでなく、統語的機能としての使用、あるいは話者の心情を表すものとしての使用等多岐にわたるため、その用法を幅広く習得することは日本語学習者にとって容易であるとは言えない。「新書」を素材とした読解教材「新書ライブラリー」の中にどのような表現が含まれているかを調べた鈴木(1998)には、形式名詞の中で「こと」「もの(みえないもの)」は「よう(様態)」とともに抜きん出て多いことが述べられており、これらの語の習得が日本語の上達に欠かせないものであることがわかる。日本語学習者はこの幅広い用法の中からどの用法を使用し、どの用法から習得していくのであろうか。

筆者は、坪根(1997)で「ものだ」「ことだ」「のだ」の各用法について理解難易度調査、

production 調査を行ったが、この場合の production 調査は英語で状況を示し、その場面に適した発話を書かせるもので、「ものだ」「ことだ」「のだ」のどれかを使うよう指示しているため、自然な発話とは言えなかった。言語の「習得」を言うためには自ら産出することが必要であり、その調査は恣意的環境ではなく、可能な限り自然発話を分析することが望ましい。そこで、坪根（2002）では OPI（oral proficiency interview）データを用い、形式名詞「もの」「こと」の各用法について韓国語話者の自然発話での使用状況を調査した。本研究はそれに続くものとして、英語話者の OPI データを用いて、形式名詞「もの」「こと」の各用法について調査し、それに基づいて可能な限りその習得について横断的に考察し、習得順序を探る。その上で、坪根（2002）の韓国語話者の結果とも比較してみる。また、資料中の誤用についての若干の分析も行うつもりである。

2. 対象

本研究で分析対象としたデータは、OPIデータの文字化資料（KYコーパス¹⁾）である。KYコーパスは英語・韓国語・中国語話者各30名、計90名のデータからなるが、本研究ではそのうち英語話者30名分を対象とした。レベル分けは初級5名、中級10名、上級10名、超級5名である。

以下で学習者に付けられている番号は、始めのEが母語が英語であること、2つ目のローマ字はOPIにおける判定結果（初級N、中級I、上級A、超級S）を表す。また3つ目にローマ字が付いている場合はサブレベルを表し、各レベルの中で下がL、中がM、上がHとなっている。例えばEIMなら母語が英語、中級の中のレベルであることを示す。

3. 調査の方法

- 1) 資料より「もの」(57例)「こと」(323例)の用例を取り出し、それらを用法毎に分類する。
- 2) 各用例の正誤判断を行う。その際、当該用法を使うべきところで使っていれば接続形等の誤りがあっても正用とする。非用については、明らかに使用すべき箇所で使用していない場合のみ誤用に含める。
- 3) 各用法の正用、誤用の数を学習者別に一覧にし、学習者毎の正用カテゴリ数（正用した用法の種類の数）を出す。
- 4) レベル別に各用法の正用者数をまとめ、それを基に正用者が60%以上の用法、正用者が30%以上60%未満の用法を取り出して表を作成する。さらに、それに基づいて習得順序の提案をする。
- 5) 複数の学習者に見られた誤用について分析する。

上記方法は坪根（2002）と同じであるが、今回の結果と坪根（2002）の韓国語話者の結

果の比較も行う。

4. 用法分類

以下の分類はほぼ坪根（2002）を踏襲しているが、「ものだ本性」を「ものだ本性・一般」とするなど、若干の変更を加えている。本研究において出現した用法のみ、例文とともに示す。（以下、TはOPIテスト、Sは学習者を表す。）

A. もの

- 1) 実質名詞：タマネギとか、いろいろなもの入れて（EA02）
- 2) ～もの：日本語そのものが、歴史の深さと、長さを示してるように、感じるんですけども（EAH06）
- 3) 形式名詞：ずっと辛いものは好きじゃありません。（EIM06）
- 4) というもの意味・定義：アプリケーションというものはですねえ、ワード**ですとか、（中略）表がつくれるとか、そういうそういうタイプなんですよ。（EAH02）
- 5) というもの一般化：それほどライスってものに集中してしまってるんだね、1億何千人が（ES02）
- 6) ものだ本性・一般：政府は簡単に変わらないものですよ。（EAH02）
- 7) ものだ感嘆：症状とかで言うとね、そりゃーまた複雑なもんでね、エイズというのはね。（ES05）
- 8) ものか本性・一般：いつまでもそれだけを封じては、世界の一員っていう風にとれるものかなーという疑問がね。（ES02）
- 9) ものか感嘆：T家元制についてはどうお思いになりますか。 S（中略）時々こうい
うもんかって、大体思うんだよね。（ES05）
- 10) もの終助詞：わたしら、それ平気で払ってるもんね。（ES02）
- 11) 定形表現：なかなか難しいものがあるんじゃないかな。（EAH09）
そんなもんね、書いて読むとおもしろくないじゃないですか。（ES07）

B. こと

- 1) 実質名詞：一応この例のことはもう一応部長さんに推薦しましたから（EAH08）
- 2) 形式名詞：詳しいことははっきり分かりません。（EAH01）
- 3) 名詞（N）のこと（こと化）：先生から借りた車のことですけど（EIH04）
- 4) 名詞（N）のこと（時）：A子さんと初めて会ったのはねー、2年前のことでしたけど（ES05）
- 5) 名詞化：全部スケジュールで決めることは嫌いですね。（EAH07）

- 6) (という)こと(は)ない：全然ないということはないと思いますけど (EAH01)
- 7) たことがある：前1年間神戸に住んだことありますけど (EIH04)
- 8) ることがある：パーティーと言わないけど、一応集まったりして、なんとか、することもある。(EAH08)
- 9) ことができる可能性：練習には6月から9月まで泳ぐことができます。(EIL01)
- 10) ことができる能力：中国語聞く時に、よく人間がその音を出すことができるという印象ですね。(EAH07)
- 11) ことにする：[大学名1]は、一番りべラルな大学だと思ひまして、そこに行くことにしましたけど (EA01)
- 12) ことになる結果：経済をやめて、日本語を教えることになったんですか。(EIH04)
- 13) ことになっている取決め：来週の水曜日にまたスピーチすることになっています。(EAH06)
- 14) ということ一般化：マウスで作業ができるということが、[ソフト名]のメイン特徴ですね。(EAH02)
- 15) ということ内容：ご存じ、家内が医者だっていうこと。(ES02)
- 16) ということ意味・定義：Sそっちの方に、なりがちですわね Tそっちの方にいいますと Sていうことは、日本防衛に (ES02)
- 17) ということ解釈：ということは前に普通の日本語の先生されたんですか。(EAH08)
- 18) ということだ伝聞：大成功したていうことなんですけども (EAH02)
- 19) ということだ解釈・理由：やっぱり自分が休んだら、他の人がもっと仕事しなといけないということですね。(EAH07)
- 20) ということだ理由・根拠：先生ていうことで、自分のやり方とかいろんな考えがありますよね。(EAH09)
- 21) ということがある事情：忙しくて自分の時間を取れないということもありますので。(EAH02)
- 22) 定形表現：いや、そんなことはない。(EAH08)
あることはあるんですけど (ES01)

5. 結果と考察

5.1. 各用法の出現分布の概要

表1-1、1-2は学習者別に「もの」「こと」各用法の使用数を示したものである。表中の数字は正用数/誤用数で示し、数字が1つのものは正用の数を表す。表の右端に総使用数と正用カテゴリ数(正用した用法の種類の数)を示してある。なお、「もの」を使うべきところで「こと」を使用した場合は「こと」の誤用としてカウントした。

まず、「もの」(表1-1)について見てみる。初級では1名の誤用のみで正用が見られない。中級以降は多くの学習者が形式名詞として使用している。中級は形式名詞と実質名詞のみの使用であるが、上級・超級では若干の使用の広がりが見られる。ただし、学習者によって使用している用法が異なり、この調査からはどの用法が使われやすいものであるかは明らかではない。正用カテゴリー数のレベル別平均値を見ると、初級0、中級0.7、上級1.4、超級2.0と、ほぼ同じ割合で伸びており、レベルが上がるにつれて「もの」の使用がコンスタントに広がっていることがわかる。総使用数は中級から上級で2倍以上に増え、上級から超級では約1.4倍に増加している。

次に「こと」(表1-2)だが、初級では使用が見られず、中級下で形式名詞、名詞化、「たことがある」「ことができる」(可能性)が、中級中以降で「Nのこと」が使用されるようになる。中級上からは使用範囲が大きく広がり、幅広く分布している様子がわかる。特に「という」を含む様々な用法が上級上から多く使用されている。事柄を直接的に述べるのではなく、「ということ」を後続させることで先行する事象を一般化する用法や、「ということ」を含む形で伝聞、解釈、理由、事情等、様々な文脈の中で使用される各用法は、「たことがある」「ことができる」のように定形表現である特定の意味を示すものと比べて、習得されにくいものだと思われる。このような傾向は、坪根(2002)で行った韓国語話者に関する調査でも見られた。上級と超級の間には、「ということ」(一般化、内容)の使用が超級で増えている以外、使用数の増加は見られず、逆に減少している用法もある。一方で誤用の傾向を見ると、早い段階で使用が認められる形式名詞、名詞化、「たことがある」や「Nのこと」は、上級、超級になっても誤用が残る。正用カテゴリー数を見ると、初級が0、中級が2.4と、この間でまず増加、中級から上級(6.0)では大きく増加しているが、上級から超級(6.8)では大きな増加は見られない。総使用数の推移を見ても、初級から中級で伸びた後、中級から上級では3.5倍以上になっている。形式名詞、「Nのこと」や「ということ」等の使用が増えたことにより、上級以降では中級と比べて抽象的で複雑な文がより多く生成されていることが推察される。

韓国語話者の結果(坪根2002)では、「もの」「こと」共に、初級から中級、上級から超級の段階で使用数、種類ともに大きく伸びていたが、本研究の英語話者では、中級から上級で他の段階より大きな伸びを示している。また、使用数計では「もの」が韓国語話者

表1-1 出現分布表（もの57例）

学習者	もの 実質名詞	～もの	もの 形式名詞	というもの 意味・定義	というもの 一般化	ものだ 本性・一般	ものだ 感嘆	ものか 本性・一般	ものか 感嘆	もの 終助詞	定形表現	総使用数	正用カテ ゴリー数
ENL01												0	0
ENM01	0 / 1											0 / 1	0
ENM02												0	0
ENH01												0	0
ENH02												0	0
小 計	0 / 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 / 1	平均0
EIL01			1									1	1
EIL02												0	0
EIL04												0	0
EIL05			1									1	1
EIM04												0	0
EIM05	1		3									4	2
EIM06			4									4	1
EIM07			1									1	1
EIH03			1									1	1
EIH04												0	0
小 計	1	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	12	平均0.7
EA01												0	0
EA02	1		1									2	2
EA03			2									2	1
EAH01			9									9	1
EAH02			1	1		1						3	3
EAH03			1									1	1
EAH06		1										1	1
EAH07												0	0
EAH08	1		1									2	2
EAH09	1		4							1		6	3
小 計	3	1	19	1	0	1	0	0	0	0	1	26	平均1.4
ES01			3									3	1
ES02			3		2			1		3		9	4
ES05			1				1		1			3	3
ES06												0	0
ES07			2								1	3	2
小 計	0	0	9	0	2	0	1	1	1	3	1	18	平均2.0
使用数計	4 / 1	1	39	1	2	1	1	1	1	3	2	56 / 1	

（表中、数字が2つ書いてあるものは正用数／誤用数、数字が1つのものは正用数を表す。）

表1-2 出現分布表 (こと323例)

学習者	こと 実数名詞	こと Nのこと 形式名詞	Nのこと こと化	Nのこと 時	こと 名詞化	(は)ない (は)ある	こと がある	こと できる可能性	こと できる能力	こと にする	こと になる結果	こと にひいて いる取決め	こと 一般化	こと 内容	こと 意味・定義	こと 解釈	こと 理由	こと 理由・根拠	こと ある事情	こと 定形 表現	こと 総使用数	こと 正用カテ 平均	
ENL01																					0	0	
ENM01																						0	0
ENM02																						0	0
ENH01																						0	0
ENH02																						0	0
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	平均0	
EIL01								2													2	1	
EIL02					2			0/1													4/1	2	
EIL04		1/5			0/2																1/7	1	
EIL05		1			6																7	2	
EIM04					5		2														7	2	
EIM05		2					0/1														2/1	1	
EIM06		3	1				1														5	3	
EIM07		1			5/1																6/1	2	
EIH03		2																			2	1	
EIH04		3	2		1	1	2	1			1										13	9	
小計	0	13/5	3	0	19/3	1	7/1	1	2/1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	49/10	平均2.4	
EA01		2			2		1		1		1										8	6	
EA02		4	2				1														7	3	
EA03		2					1														4	3	
EAH01		7	2/1			1															11/1	4	
EAH02		12	4			3	1	1		1	1		3	2		1	1			31	12		
EAH03		6/1	1		1																8/1	3	
EAH06		25	4					1		1			1	5							39	8	
EAH07		6	2		3		1		1				1			1					15	7	
EAH08	1	17/1	12/1		1/1	6/1	2				3		0/1	2		1				1	46/5	10	
EAH09		3/1	4								1						1				9/1	4	
小計	1	84/3	31/2	0	7/1	1	14/1	3	4	1	3	6	1	5/1	9	0	2	1	2	1	178/8	平均6.0	
ES01		5	1/1		1		1				1		2	1							14/1	9	
ES02		5/1	1		1	1						1	3	9	1			1	1		25/1	11	
ES05		4		1							1			1							7	4	
ES06		9			0/1		2														12/1	3	
ES07		9	2											1	2		1	1			17	7	
小計	0	32/1	4/1	1	2/1	1	4	0	1	0	2	1	6	13	1	0	2	1	2	1	75/3	平均6.8	
使用数計	1	129/9	38/3	1	28/5	3	25/2	4	7/1	1	3	9	2	12/1	22	1	4	3	3	3	302/21		

(表中、数字が2つ書いてあるものは正用数/誤用数、数字が1つのものは正用数を表す。)

表2-1 「もの」レベル別正用人数（一つでも正用のあった人の数）

レベル	もの 実質名詞	～もの 形式名詞	もの 形式名詞	というもの 意味・定義	というもの 一般化	ものだ 本性・一般	ものだ 感嘆	ものか 本性・一般	ものか 感嘆	もの 終助詞	定形表現
初級 (5)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級 (10)	1	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0
上級 (10)	3	1	7	1	0	1	0	0	0	0	1
超級 (5)	0	0	4	0	1	0	1	1	1	1	1

は正用人数が60%以上のもの

は正用人数が30%以上60%未満のもの

表2-2 「こと」レベル別正用人数（一つでも正用のあった人の数）

レベル	こと 実質名詞	こと 形式名詞	Nのこと こと化	Nのこと 時	こと 名詞化	(という)こと (は)ない	たことがある	ことができる 可能性がある	ことができる 能力	ことにする
初級 (5)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級 (10)	0	7	2	0	5	1	4	1	0	0
上級 (10)	1	10	8	0	4	1	7	2	1	3
超級 (5)	0	5	3	1	2	1	3	0	0	0

レベル	ことなる 結果	ことになって いる取り決め	ということ 一般化	ということ 内容	ということ 意味・定義	ということ 解釈	ということだ 伝聞	ということだ 解釈・理由	ということだ 理由・根拠	ということが ある事情	定形表現
初級 (5)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級 (10)	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
上級 (10)	4	1	3	3	0	1	1	2	1	2	1
超級 (5)	2	1	3	4	1	0	2	1	2	1	1

は正用人数が60%以上のもの

は正用人数が30%以上60%未満のもの

104例に対し英語話者が57例、「こと」が韓国語話者375例に対し英語話者が323例で、英語話者の数が韓国語話者をかなり下回っている。特に英語話者の「もの」の使用数の少なさが目立つ。正用カテゴリー数については、上級で英語話者の方が上回っているが（「もの」韓国語話者1.0、英語話者1.4、「こと」韓国語話者4.7、英語話者6.0）、それ以外のレベルでは韓国語話者の方が多く、超級では「もの」韓国語話者2.6、英語話者2.0、「こと」韓国語話者8.6、英語話者6.8となっている。つまり、この2つの研究からは、韓国語話者の方が早い段階で「もの」「こと」を使用し始め、英語話者の方は若干遅れて上級で使用種類の広がりが見られるようになる。しかし、その後の伸びは韓国語話者の方が大きいということが示唆される。

5.2. 習得状況

表1-1、1-2より各レベル毎の正用人数（1つでも正用のあった人の数）をまとめたものが表2-1、2-2である。更に、表2-1、2-2を基にレベル別習得状況をまとめた（表3）。OPIという性格上、多くの出現を期待できない用法もあり、各用法を同じように議論することはできないが、少なくとも多くの学習者によって使用（正用）されているものについては、そのレベルで習得が進んでいるものと考えることができる。そこで、各レベルで60%以上の正用者がいる用法を習得段階が高いもの、30%以上60%未満のものを少なくとも習得が始まったと考えられるものと規定し、それをまとめたものが表3である。初めてその割合に達した用法が各欄に入れてある。以下、主に表3をもとに習得状況について考察する。

これによると、初級では全く正用がなかった「もの」「こと」は、中級の形式名詞の用法から習得が始まる。「たことがある」も中級で習得が見られはじめ、上級で正用者が増えて習得が進んでいる。上級ではこの他、「Nのこと」の習得も見られる。「こと」の名詞化の用法は、中級で正用者30~60%となっているが、その後も同じ段階にとどまっている。上級・超級学習者の名詞化用法の「の」の使用を確認しても、「こと」の代わりに「の」を特別に多く使用していることは認められない。英語話者は名詞修飾節を多く生成していない可能性もあるが、これについては更なる研究が必要であろう。「ということ」（一般化）、「ということ」（内容）は上級で習得が始まり、超級になると習得が進む。上級ではその他、「ことができる」（可能性）、「ことにする」、「ことになる」（結果）、超級では「ということだ」（伝聞）、「ということ」（理由・根拠）といった様々な文末表現・接続表現の習得も見られ始める。つまり、中級は形式名詞、名詞化の用法といった構文的に必要な機能が習得される段階、上級・超級は対象を直接指し示さない用法や、特別なニュアンスを示す用法が習得される段階であると言えるであろう。

表3 レベル別習得状況

レベル	習得段階高：正用者60%以上	習得段階初：正用者30～60%
初級		
中級	もの形式名詞 こと形式名詞	こと名詞化 たことがある
上級	Nのこと たことがある	もの実質名詞 ことができる可能性 ことにする ことになる結果 ということ一般化、内容
超級	ということ一般化、内容	ということだ伝聞 ということ理由・根拠

以上レベル別習得状況について述べてきたが、ここから可能な限り習得順序を探ってみる。習得段階初（正用者30%以上60%未満）から習得段階高（正用者60%以上）に段階が進んだ時点で習得されたとし、より早く習得段階初に現れ、より早く習得段階高に達したものを先に習得されたものと規定すると、以下のような順序が提案できる（表4-1）。なお習得段階高に現れていない用法は考察対象から外した。

「もの」「こと」の形式名詞としての用法が最も早く習得されることがわかるが、韓国語話者の習得順序を示した表4-2と比べると、「たことがある」と形式名詞の習得順序が異なっている。また、大きな違いとして韓国語話者の調査では、「こと」の名詞化用法は中級段階で習得段階高となり、形式名詞（もの・こと）と同じ段階で習得されることが示唆されたが、英語話者の方では、使用者数の伸びが認められず、習得段階高には至らなかった。その他にも韓国語話者の方で習得が見られた「というもの」（一般化）、「こと（は）ない」は、英語話者では使用数が少なく、習得が認められなかった。

表4-1 習得順序（英語話者）

習得順序 ↓	1	もの形式名詞、こと形式名詞
	2	たことがある
	3	Nのこと
	4	ということ一般化、ということ内容

表4-2 習得順序(韓国語話者)(坪根(2002)より)

習得 順序 ↓	1	たことがある
	2	もの形式名詞、こと形式名詞、こと名詞化
	3	(ことができる可能性)
	4	Nのこと
	5	というもの一般化、こと(は)ない、ということ一般化、ということ内容

5.3. 誤用分析

韓国語話者の調査で見られた「もの」と「こと」の混同、過去の経験でなく単なる過去の出来事に使用するという「たことがある」の誤用は、英語話者においても出現している。上記2つの他に、「Nのこと」、名詞化の用法でも複数の誤用が見られた。本稿では形式名詞「もの」「こと」の混同、「Nのこと」、名詞化の誤用の3つについて取り上げる。

1) 形式名詞「もの」「こと」の混同

例 a : 向こうは、交換、姉妹校とかそういう*こともありますし (EAH09)

例 b : T何か盗られましたか Sうん、まだあの、あの盗んだ*こと見つけてないですけど、本当にメチャクチャから、あのはっきりわかりませんが (EAH03)

誤用の中で、「もの」を使うべきところで「こと」を使用したものが最も多く、その逆の「こと」を使うべきところで「もの」を使った誤用は見られなかった²⁾。例aでは「姉妹校というシステム」という意味で目に見えないものを指すと考え、「こと」を使ってしまったとも推測されるが、目に見えなくても、時間軸に沿って起こり、経過し、存在し、消滅する現象である「こと」ではなく、存在を表す「もの」を使うべきところである。例bは盗まれた対象(存在物)を指すため、「もの」を使うべきだが、「こと」が使われている。英語で「もの」「こと」は「thing」という同じ語で表すが、英語話者は「thing」を「こと」に結びつけやすいという傾向があるのであろうか。

2) Nのこと

例 a : 第二次戦争で、*爆発のことで工場がこわして、なかなか立ち上がりませんでした。(EAH01)

例 b : 日本の会社の、なんて言う、*残業のことが多い。(EAH08)

この誤用は、「のこと」を付けて「こと化」する必要のないところにも付けてしまっているものである。「こと」は思考動詞、伝達動詞、意志動詞、表示動詞などの対象を表すときに使われ(工藤1985)、例えば「爆発」「残業」という名詞でも以下のような文では「こと」が必要となる。

例 c : 昨日の工場での爆発のことを考えると、頭が痛い。

例 d : 彼女の残業のことを上司に話した。

上記 c, d の例では、考えたり（思考動詞）、話したり（伝達動詞）するためには、対象はその名詞で表される存在でなく、生起する内容が必要であるため、「こと」が付けられるのである。

3) 名詞化

例 a : 弁護士が自殺する *ことを見ました。(EIM07)

例 b : (趣味を聞かれて) クラシックの本を読むとー、美術 (EIL04)

例aでは、後続する動詞が「見る」という感覚動詞であるため「の」を使うべきところだが、「こと」を使ってしまっている。例bは「こと」を使って「(趣味は) 本を読むことと」と名詞化すべきところで使用していない非用の例である。

6. まとめと今後の課題

本研究では、英語話者の OPI データを用いて、形式名詞「もの」「こと」の各用法の自然発話における使用と習得について考察し、その習得順序について可能な限りの提案をした。また、韓国語話者の調査結果とも一部比較を行った。以下に本研究において明らかになったことをまとめる。

- 1) 本研究から推測できる習得順序は、①もの形式名詞、こと形式名詞→②たことがある→③Nのこと→④ということ一般化、ということ内容、の順である。それ以外の用法については使用数が少ないため、明らかにならなかった。
- 2) 「もの」「こと」共に初級では正用が現れなかった。「もの」はその後中級、上級、超級と進むにつれて、ほぼ同じ割合で正用カテゴリー数（正用した用法の種類の数）が増え、使用数は中級から上級での増加が大きい。一方、「こと」は中級でいったん使用数、正用カテゴリー数とも伸び、その後、上級で用法の種類の広がりとともに際立った伸びが見られるが、上級から超級の間には大きな伸びは見られなかった。
- 3) 中級は形式名詞、名詞化の用法といった構文的に必要な機能が習得される段階、上級・超級は対象を直接指し示さない用法や、特別なニュアンスを示す用法が習得される段階である。
- 4) 韓国語話者と比較すると、韓国語話者は「もの」「こと」共に、初級から中級、上級から超級の段階で使用数、種類ともに大きく伸びていたが、本研究の英語話者では、中級から上級で他の段階より大きな伸びを示している。また、使用数計、正用カテゴリー数については、上級を除いて、英語話者の数が韓国語話者を下回っている。つまり、韓国語話者の方が早い段階で「もの」「こと」を使用し始め、英語話者の方は若干遅れて使用が大きく広がるが、その後の伸びは韓国語話者の方が大きいということ

が推察される。習得順序については、「たことがある」と形式名詞の習得順序が異なつた他、韓国語話者の方で習得が認められた「こと」の名詞化用法は習得段階高には至らず、「というもの」(一般化)、「こと(は)ない」も英語話者の方では使用数が少なく習得が認められなかった。

- 5) 韓国語話者同様、「もの」と「こと」の混同、「たことがある」の誤用が見られた。また、「Nのこと」、名詞化の用法の誤用も見られた。

本研究では、坪根(2002)に続き、OPIデータを用いて形式名詞「もの」「こと」の使用を自然発話の資料を用いて考察した。本研究で横断的調査によって提案した習得順序を検証するためには、縦断的調査も必要である。また、今回出現数が少ない、あるいは出現しなかったために論じることのできなかつた用法については、発話環境を整えることによって、その習得について検証する必要があるだろう。今後は中国語話者について分析を行い、韓国語話者、英語話者との比較を行うつもりである。

注

- 1) 「KYコーパス」とは文部省科学研究費補助金・基盤研究『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』(研究代表者カッケンブッシュ寛子)において鎌田修氏と山内博之氏が中心となつて行ったOPIの文字化資料を指す。
- 2) 韓国語話者の調査でも、「こと」の代わりに「もの」を使う誤用より、「もの」の代わりに「こと」を使用してしまう誤用の方が多かったが、以下のような「こと」の代わりに「もの」を使った誤用も見られた。(誤用例: 人間を殺したという側面からはじめて、金銭的な蓄積もあって、あつたし、いろんな*ものがあつたんで)

参考文献

- 鎌田修（1999）「KYコーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第二言語としての日本語習得に関する総合研究』科学研究報告書08308019 代表者 カッケンブッシュ寛子、pp.227-237
- 金銀淑（1989）「連体修飾構造における『トイウ』の意味機能」『国語学研究』29、東北大学文学部『国語学研究』刊行会、pp.21-34
- 工藤真由美（1985）「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学解釈と鑑賞』3月号、至文堂、pp.45-52
- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 鈴木庸子（1998）「上級日本語読解教材『新書ライブラリー』の表現調査」『文部省科学研究費補助金重点領域研究「人文科学とコンピュータ」1997年度研究成果報告書』、pp.87-94
- 田中真理（1999）「OPIにおける日本語ヴォイスの習得状況：英語・韓国語・中国語話者の場合」『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』、pp.335-350
- 坪根由香里（1994）「『もの』『こと』『の』に関する考察 -その意義素を求めて-」、未公刊修士論文、南山大学
- 坪根由香里（1997）「『ものだ』『ことだ』『のだ』の理解難易度調査」『第二言語としての日本語の習得研究』創刊号、pp.137-156
- 坪根由香里（2000）「日本語教育の読解教材における『こと』の分析」『小出記念日本語教育研究会論文集』8、pp.53-67
- 坪根由香里（2002）「OPIにおける韓国語話者の『もの』『こと』の使用と習得」『ICU日本語教育研究センター紀要』10、国際基督教大学日本語教育研究センター、pp. 23-35
- 原田登美、小谷博泰（1991）「日本語『もの』と『こと』」『甲南大学紀要文学編』84、pp.1-34
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店